



2015年5月13日放送

頻用処方解説 大建中湯①

山口大学医学部附属病院 漢方診療部(非常勤)

梶井内科 院長 梶井 信洋

主な効能

まず主な効能効果ですが、大建中湯は虚証で 冷え症で、強度の腹痛・腹満、発作性の腹痛・腹満に用います。これを寒疝といい、腸管蠕動不穏や多量のガス貯留を同時に認めます。すなわち大建中湯は腹部を温めて寒を改善し、腹痛を緩解させる処方です。言い換えると、大建中湯は体力が低下した人で、お腹が寒えて、消化管機能が衰え、水とガスが停滞し、腹痛・腹満・鼓腸などを呈する場合に用います。

その腹痛は比較的顕著で発作的です。またお腹が寒える・手足が寒える・悪心嘔吐・便秘下痢・飲食不能・脈遅弱など「寒」の症状を伴います。そして腹壁が薄く軟弱無力で鼓腸を呈することが多く、時に腸がムクムクと動いて腸管の蠕動亢進を外から望診できたり、腹診で触れることができます。この蠕動亢進が激しい時には腹痛を訴え、嘔吐することもあります。また望診で蠕動不穏を認めることはできなくても、問診で「お腹の中でモクモクと腸が動くのを感じる」という自覚症状を聞き出すことも有用です。また、ガスの充満がはなはだしい時には、腹部全体がパンパンに張って緊満状となり、腸の蠕動が判然としないこともあります。

以上から、現代では術後イレウス、癒着性腸管通過障害、過敏性腸症候群、機能的胃腸障害、寒冷や腸管ガスによる腹痛、虚血性腸炎などに用いられます。また胆石発作、慢性膵炎、尿路結石、尿道痛、乳汁分泌不全、習慣性流産、喘息、耳鳴、蛔虫症などに、大建中湯の証が認められれば広く応用されます。

出典・処方名の由来

処方の出典、処方名の由来についてお話しします。大建中湯の出典は『金匱要略』「腹満寒疝宿食病脈証并治第十」の篇の中に条文があります。この篇は、腹部にガスや便が充満したり、冷えて腹痛が起こったり、食べた物が胃腸にもたれたりなどの、主に腹部消化管に現れる症状に対しての治療方法が論じられています。

「心胸中、大いに寒え痛み、嘔して飲食する能わず、腹中寒、上衝して皮起り、出で見れば、頭足ありて上下し、痛みて触れ近づくべからざるは、大建中湯之を主る。」

大建中湯の条文には、いろいろな訓み方がありますが、大塚敬節（1900-1980）の『金匱要略講話』を参考にすると、「心下部から胸部にかけて、大変冷えてひどく痛み、吐き気がして食べたり飲んだりすることができない。腹中もまた非常に冷えて、とても痛い。そして診察すると、腸蠕動が腹壁に現れて、ムクムクと動くのが見え、まるで頭と尾があるような様子で、それが上下に行き来する。それで痛くて触ることもできない。このような状態を大建中湯が主治する。」というものです。

そして条文の方後には、「まず初回を一服して、小一時間ほど経ってから熱いお粥を食べます。その後 2~3 時間ほどしたら、更に二回目を服します。そして、本方服用中は、一日中お粥を食べて、布団をかぶって温かくして寝ておくべし。」とあります。このようにして お腹を温めることを補助するわけです。

さらに『医宗金鑑』では、「微しく汗を発せしめて、寒を去り、痛みを止める。」と、発汗の必要性が説いてあります。

次に、処方名の由来ですが、浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤薬室方函口訣』小建中湯の条に「スベテ古方書ニ“中”ト云ウハ脾胃ノコトトテ、建中ハ“脾胃ヲ建立スル”ノ義ナリ。」とあり、建中とは、脾胃すなわち消化管機能を建て直すという意味です。

また、大小については、尾台榕堂（1799-1871）の『類聚方広義』小承気湯の頭註で、「夫レ方ニ“大小”有ルハ、病ニ軽重緩急アルヲ以テナリ。豈ニ特リ、大小ノ制(=等級)ノミナラン哉。」とあって、薬方名の上に、大とか小とか冠するのは、病に軽症と重症、慢性と急性とがあって、それぞれに適した方剤があるからで、薬自体が上級だとか下級だとかを区別しているのではないと述べています。つまり、それぞれの処方の適応病態の差、ここでは大建中湯は小建中湯より一段と寒冷で、腹痛の強い病態であることなどを意味しています。

大建中湯は人参・乾姜・蜀椒・膠飴からなり、小建中湯は桂皮・芍薬・大棗・生姜・甘草・膠飴からなり、名前はよく似ていますが、共通しているのは膠飴のみです。大建中湯はむしろ人参湯の去加方とみるべきもので、人参湯から朮と甘草を去り、蜀椒と膠飴を加えたものです。このように生薬面からも、適応する証の面からも、両者に違いがあることから、大建中湯合小建中湯、いわゆる中建中湯という合方も成立することが理解できます。

生薬構成の漢方的解説（薬能）

次に、構成生薬の薬能について述べます。大建中湯の構成生薬は、人参・乾姜・蜀椒（エキス剤では山椒）・膠飴の 4 味で、すべて体を温める食物からなっています。蜀椒・乾姜は強い温熱性刺激薬で、寒邪を除く力が強く、弛緩した組織に活力を与え、これを緊張させ

る効能があります。人参は胃腸を強壯にするとともに消化吸収を促進します。以上の3味が協力し合って、冷えて低下した消化管の新陳代謝を高めます。また蜀椒には局所麻酔作用もあり、これが膠飴と協力して、強い鎮痛効果を発揮します。膠飴は急迫症状を緩和し、鎮痛作用を有し、かつ滋養の効能もあり、『勿誤藥室方函口訣』の大建中湯の条では「膠飴一味アルヲ以テ建中ノ意、明了ナリ。」とあり、消化管機能の建て直しにとって膠飴が大切な生薬であることが分ります。

また大塚敬節は蜀椒が腸の運動を亢進させるばかりでなく、ある場合には鎮静させるという2通りの働きがあるとも述べています。ただし蜀椒は分量を多くし過ぎると、浮腫・乾性咳嗽・膀胱炎などを誘発することがあると、注意してもいます。

以上の薬能により、大建中湯は強い冷えを除き、腹痛を治し、新陳代謝を高め、消化管機能を建て直す効果のあることが理解できます。

古医書における記載（江戸～明治・大正期）

江戸から、明治・大正期における古医書の記載を紹介します。福井楓亭(1725-1792)の『方読弁解』では、大建中湯は身体が冷えて、お腹の中に急に激しい痛み(腹中拘急：疝痛)を感じ、特に臍の周囲で痛みが大変に強く、寝返りをうつこと(起臥転側)もできないと記載されています。

稲葉文礼(?-1809)の『腹証奇覽』では、3種類の腹証が図示されており、次のように説明されています。(大建中湯の)腹証Ⅰ「腹の皮ムクムクと起こりて、頭足ある者の如き」「たとえば、樹の枝を袋に包みて、押してみるが如し」。(大建中湯の)腹証Ⅱ「時々蛇鰻の如く腹中を遊走して痛む毒」「其の患忍べからず。諸薬も効なし」。(大建中湯の)腹証Ⅲ「毒遊走して浪を揚るが如きもの」「腹、常には平穩にして、発する時は腹皮動いて波の打来るが如き者」とあります。

その弟子の、和久田叔虎の『腹証奇覽翼』(1805年?)にも腹証が図示されており、「塊りのような物が、腹中より上衝して、心下にせまり、大いに急痛して死せんと欲す。痛み甚だしく、触れ近づくべからず。乾嘔して、身体に冷汗流るるが如くなるもの。」と記載されています。

津田玄仙(1737-1809)の『療治経験筆記』には、大建中湯は厥冷に腹痛を兼ねたもの、または腹痛に厥冷を兼ねたもの、また虫積(慢性寄生虫病)の厥冷など。手足の先まで冷える強い寒(ひえ)を目標とする、とあります。

尾台榕堂(1799-1879)の『類聚方広義』の頭註には、「大建中湯は寒飲升降、心腹劇痛して嘔するものを治す。」とあります。以上のような古医書の記載があり、現代に口訣として伝わっています。